

簿記・会計

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和5年度共通テストが実施された。令和5年度共通テスト本試験の「簿記・会計」の受験者数は、＜資料1＞で示すとおり、昨年度より26名の減少となった。簿記・会計を学んだ生徒にとっては、学びの成果を進路実現に生かす機会であり、次年度で最後になるが、多くの受験者の挑戦を期待するところである。

＜資料1＞「簿記・会計」の受験者数・平均点の推移（大学入試センター発表）

年 度	受験者数	平均点
平成30	1,487	59.15
平成31	1,304	58.92
令和2	1,434	54.98
令和3	1,298	49.90
令和4	1,434	51.83
令和5	1,408	50.80

共通テストは、センター試験における問題評価・改善の蓄積を生かしつつ、知識の理解の質を問う問題や、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題が重視される。また、授業において生徒が学習する場面や、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面、資料やデータ等を基に考察する場面など、学習の過程を意識した問題の場面設定が重視される。本年度の平均点は、昨年度の51.83点より約1点下がり50.80点となったが、全般的に難易度は適正であると思われる。これは、作問に当たり、受験者の実態を的確に捉え、過年度の出題等について綿密に分析・検討を行い、今回の出題に反映された結果だと考えられ、評価できる結果であった。

以上のことから、「簿記・会計」の内容・範囲、難易度や分量、表現及び形式、また、センター試験及び共通テストにおける要望や意見への対応等を踏まえ、次のような観点から分析・検討を行う。

- (1) 問題作成方針を踏まえて、知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題の出題も含め、バランスのとれた出題となっている（出題のねらい）
- (2) 学習指導要領の範囲内から出題されており、特定の分野・領域に極端に偏っていない（出題範囲）
- (3) 問題で使用される資料等が、特定の教科書に偏っていない（題材）
- (4) 高等学校における学習の過程を意識した問題の場面設定がなされた問題が含まれており、その場面設定が、教科・科目の本質に照らし必然性のある形で出題されている（問題の場面設定）
- (5) 試験問題の構成（設問数、配点、設問形式等）は適切である（問題構成）
- (6) 文章表現・用語は適切である（表現・用語）
- (7) 問題の難易度は適正である（難易度）
- (8) 得点のちらばりは適正である（得点のちらばり）

なお、評価に当たっては、14ページに記載の八つの観点により、総合的に検討を行った。

2 試験問題の範囲・構成等

今回の出題内容は、すべての問題において学習指導要領の範囲内であり、特定の教科書や分野に偏ってはならず、学習指導要領の目標に沿って、簿記・会計の基本的な仕組みの総合的な理解度を見ることのできる問題となっている。令和5年度の「簿記・会計」の出題内容と配点、学習指導要領との関連を整理すれば、＜資料2＞のとおりである。

＜資料2＞共通テスト「簿記・会計」の出題内容等一覧

第1問（配点40）

設問(配点)	出題内容	学習指導要領との関連
A (20) 問1 (8) 問2 (8) 問3 (2) 問4 (2)	○損益計算と資本の増減に関する問題 ・決算振替仕訳（当期純損益の把握と資本金勘定への振替） ・資本の追加元入れ ・資本取引と損益取引の区別 ○連続する年度の貸借対照表、損益計算書の金額を答える問題 ○資本の引き出しに関する問題 ○剰余金の配当と処分	簿記(1)簿記の基礎 イ資産・負債・純資産と貸借対照表 ウ収益・費用と損益計算書 エ簿記一巡の手続 (2)取引の処理 オ個人企業の純資産と税 財務会計 I (1)財務会計の基礎
B (20) 問1 (2) 問2 (6) 問3 (2) 問4 (2) 問5 (2) 問6 (2) 問7 (4)	○個人企業の簿記研修会における新入社員と講師との会話形式の問題 ・簿記上の取引 ・取引要素の結合関係 ・繰越試算表と仕訳帳の関連 ・仕訳と転記 ・統制勘定 ・企業会計原則（一般原則）	簿記(1)簿記の基礎 ア簿記の概要 エ簿記一巡の手続 (2)取引の処理 カ販売費及び一般管理費 財務会計 I (1)財務会計の基礎

第2問（配点30）

問1 (8) 問2 (12) 問3 (8) 問4 (2)	○複合仕訳帳制度を採用する個人企業の記録から、普通仕訳帳・当座預金出納帳・仕入帳・総勘定元帳・買掛金元帳・支払手形記入帳の空欄（勘定科目・金額・元丁番号）を答える問題 ○本支店会計に関する問題	簿記(4)本支店会計 ア本店・支店間の取引 イ財務諸表の合併 (5)会計帳簿と帳簿組織 ウ仕訳帳の分割
---------------------------------------	---	---

第3問（配点30）

問1 (24) 問2 (4) 問3 (2)	○株式会社の期末の取引及び決算整理事項等から、損益計算書・貸借対照表の空欄（勘定科目・金額）を答える問題 ○新株発行時の仕訳に関する問題	簿記(3)決算 ア決算整理 イ財務諸表の作成 財務会計 I (1)財務会計の基礎
-----------------------------	---	---

3 試験問題の内容・分量・程度・表現等

全体的な難易度は昨年度と同程度と思われるが、資料の読み取りに時間がかかる問題が見受けられ、やや解答時間に不足があったように思われる。第1問は、設問Aと設問Bで構成され、Aは損益計算と資本の増減に関する個別問題である。当期純損益の把握、追加元入れ、引き出し、剰余金の配当と処分についての計算や仕訳、資本取引と損益取引との区別に関する理解度を問う問題であり、内容・程度ともに適切であった。Bは、個人企業の簿記研修会における新入社員と講師との会話形式の問題になっており、簿記上の取引から取引要素の結合関係、繰越試算表と仕訳帳の関連や仕訳と転記、統制勘定の特徴等について、幅広い知識と理解度を問う問題であり、内容・程度ともに適切である。第2問は、複合仕訳帳制度を採用する個人企業の記録から、普通仕訳帳・当座預金出納帳・仕入帳・総勘定元帳・買掛金元帳・支払手形記入帳の空欄（勘定科目・金額・元丁番号）を答える問題と本支店間における未達事項の整理、支店における本店勘定に関する問題があり、総合的な理解力と思考力が要求された。また、ボリュームもあることから、試験時間の多くをこの問題に費やした受験者も多かったと思われる。第3問は、株式会社の決算に関する問題である。期末の取引や決算整理事項等も基本的なレベルであり、解答しやすい問題であった。

全体として、基礎的・基本的な事項から思考力、判断力を問う問題までがバランスよく出題されており、出題のねらいも明確である。また、例年どおりの大問が3つの問題構成は、解答時間のバランスを保つ上で重要な役割を果たすことから、第2問のボリュームをもう少し絞ってもよいと思われる。受験者には「簿記・会計」の仕組みの総合的理解が求められ、学習の達成度を図る問題として適切である。設問文や形式は明瞭簡潔で無駄や不足はなく、文章表現や漢字表記も難解にならないように配慮されている。ページ配置については、総合的な資料の読み取りが必要な第2問は下書き用紙も含めて計6ページあるが、読み取りやすさの確保はできている。また、各資料に付されている「(注)」もフォントサイズが適当な大きさと、受験者が解きやすいよう配慮されている。配点についても、すべて2点問題で統一され、受験者の得意・不得意が点数の差に結びつかないように配慮されている。多くの点でセンター試験及び共通テストにおける意見・要望が生かされており、次年度も引き続きこのような配慮をお願いしたい。

第1問 Aは、損益計算と資本の増減に関する問題である。問1から問4までが独立した問題構成になっており、それぞれ基礎的・基本的な知識を問う問題であった。問1は、決算における損益勘定の記帳方法についてのルールを答えさせる問題である。資本取引と損益取引とを明瞭に区別することにも触れられており、財務会計Iの知識も必要となる。問2は、連続する各年度の貸借対照表と損益計算書の空欄を埋める形式の問題であり、簿記の授業でもよく目にする計算問題である。問3は、事業主の引き出しに関する訂正仕訳（引出金勘定を用いない場合）を選ぶ問題である。問4は、会社法に規定する利益準備金の積立額を問う問題であり、資本金の4分の1から利益準備金と資本準備金を差し引いた金額と配当金額に10分の1を乗じた金額を計算し、いずれか低い金額を積立額とするという判断が必要である。手間取った受験者も多かったのか、正答率は高くなかった。

Bは、個人企業の簿記研修会における新入社員と講師の会話文から、空欄を埋める問題である。昨年度と同様に大学入試センターの共通テスト問題作成方針に則り、「どのように学ぶか」を踏まえた、新入社員研修を想定した場面設定は簿記・会計の共通テストに相応しい内容である。問1は、簿記上の取引を選ぶ問題で、基礎的な問題であったが、正解に至らない受験者も多かった。問2は取引要素の結合関係に関する問題である。基本的な問題だが、取引の二面性の理解を問う良問である。問3は、記帳技術に関する問題である。期首の仕訳帳に前期末の繰

越試算表合計額を記入することで、記帳の正確性が確認できることを問う問題であり、良問である。問4は、仕訳帳の小書きから勘定科目を推定する問題であるが、送金小切手の振出人が分かる記述がなく、戸惑った受験者もいたのではなかろうか。問5は総勘定元帳の摘要欄と借方・貸方の金額を答える問題であり、仕訳帳から総勘定元帳への転記を問う基本的な内容である。問6は、補助簿を選ぶ問題である。証ひょう、伝票、主要簿、補助簿等の分類に関する知識が問われる。問7は、販売費及び一般管理費元帳の記入内容をまとめて(統制して)いる販売費及び一般管理費勘定の役割上の名称を問う問題である。授業では販売費及び一般管理費勘定を用いず、個別の勘定科目で処理することが一般的だが、正答率は悪くなかった。

第2問 昨年度同様、複合仕訳帳制度を採用している個人企業における各種帳簿上の空欄を埋める問題である。問1の「ア」と「イ」については、「資料1」の仕訳から判断でき、基礎的な内容である。問2の「ウエ」は、24日の取引について、「資料6」の支払手形記入帳と買掛金元帳(岐阜商店)の関係を読み取る必要があり、難易度は高いが良問である。「カキ」については、当座預金出納帳のみでの処理に戸惑った受験者も多かったと思われる。また、31日は「資料3」の当座預金出納帳の借方の合計金額から前月繰越高を差し引いて逆算していく。前月繰越高は「資料4」の総勘定元帳(当座預金)の前期繰越高であることに気付く必要がある。「シス」は、約束手形の振り出し額を「資料6」の手形記入帳から判断する。「トナ」は、総勘定元帳(買掛金)の前期繰越高から買掛金元帳(長野商店)の前月繰越高を差し引いた金額であることに気付くかがポイントとなる。問3の「オ」は、売上帳が特殊仕訳帳であるためチェックマークを記入する。仕入帳31日の「セ」は月末のため、値引返品高を総勘定元帳(買掛金)の借方と総勘定元帳(仕入)の貸方に合計転記することから答えを選択する。「ソ」は、「資料1」の15日の仕訳から、当座預金出納帳が使われていることがわかる。問4の「ニヌ」は、「資料1」の4日の取引が×4年中唯一の未達取引であることから「資料4」の本店における支店勘定の前期繰越高¥690から未達分¥270を差し引いた¥420になることに気付く必要がある。

設問全体としては、第2問は最もボリュームが多く、帳簿のつながりを見渡しながら取引を推定する力が問われることから、読み取りに時間をとられてしまった受験者も多かったと思われる。全体的に正答率が低い傾向にあった。

第3問 株式会社の決算において損益計算書と貸借対照表を完成させる問題である。「資料1」は、決算整理前の残高試算表が与えられ、「資料2」は、「資料1」以降の5日分の取引が記載してあり、正確な仕訳が求められる。「資料3」は決算整理事項等の処理である。「資料1」→「資料2」→「資料3」の時系列で取引を読み取る力が求められる。「カキ」は「資料3」10の中間納付額と「資料4」の貸借対照表上の未払法人税等との合計額であることに気付くことができるかがポイントになる。「ス」は「資料3」8から「資料1」の支払家賃勘定が16か月分であることに気付き、費用の繰り延べに関する正確な仕訳ができるかを問う良問であるが、前払家賃や支払家賃の金額を答えさせてもよかったのではないだろうか。問3は株式の発行に際し、会社法に規定する最高限度額を資本金としない場合の仕訳処理を選ぶ問題である。

設問全体としては、決算に関する幅広い知識を問う基礎的な問題であり、取引の量、推定箇所数は適切で、バランスのとれた構成となっている。しかし、第2問に時間をとられてしまい、あまり第3問に解答時間をとれなかった受験者が多かったように思われる。

4 ま と め(総括的な評価)

- (1) 受験者の学習達成度を適正に判定できる問題である。今回の問題は、幅広い知識と理解の質を問う出題と思考力、判断力を発揮して解くことが求められる出題であった。このことは、高等学

校において簿記・会計を理論的かつバランスよく学ぶことの必要性を示唆しており、今後の簿記・会計教育の在り方への一つのメッセージであると考えます。来年度もこのような作問がなされ、高等学校における簿記・会計教育のさらなる発展につなげていってほしい。

- (2) 昨年度同様、やや解答時間に不足が生じている傾向が見受けられる。受験者が解答をする上で、適切な時間が確保できるような問題作成の配慮をお願いしたい。また、簿記・会計は高校入学後に初学することを踏まえ、学習指導要領の範囲内の出題はもちろんのこと、教科書で使用されている表現の使用等の重視を来年度もお願いしたい。